

第3章

【制度編】大学と新しい教養

吉見俊哉×大澤聡

吉見俊哉 (よしみ・しゅんや)

1957年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。現在、東京大学大学院情報学環教授。社会学・文化研究・メディア研究を専攻。主な著書に『都市のドラマツルギー』『「声」の資本主義』（以上、河出文庫）、『大学とは何か』（岩波新書）、『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社新書）など。

カルチュラル・スタディーズという比較的新しい研究潮流がある。既存の学問領域の壁をぶち壊しながら、文化現象の背後にある政治性をえぐり出し議論の俎上にのせるというものなのだけれど、わたしが大学に入った2000年前後はまさにその最盛期で、中心にいたのが吉見俊哉さんだった。いまわたしがあれやこれやのディシプリンを渡り歩きながら横断的に仕事をやっているのも、やっぱり1990年代以降に位置していればこそなのだろう。

そうした流れを牽引してきた吉見さんが、大学の運営側にまわって大学論を展開する。「文系学部廃止」騒動に際しては関連本も緊急出版した。カルチュラル・スタディーズの精神を制度に実装するという、どこかアクロバティックなプロジェクトに精力的に挑戦されているようにわたしには見えた。そこで第3章では、吉見さんとともに大学というシステムの来歴と、来たるべき「新たな大学」の設計案をめぐる対話していく。教養再生の実験場として大学をいかに機能させるのか。「理系的な知」と「文系的な知」の幸福な関係は可能か。おたがいにメディア研究を専門としていることもあって、出版やアーカイブの観点から捉えなおすことも試みる。

ちなみに、この対談収録は指定された午前9時ぴったりに東京大学の吉見研究室ではじまった。そんな時間帯に対談することじたい、わたしははじめての経験で、いかに自分が学生時代以来の夜型生活を送っているかを思い知ることになる。第一線であれだけの仕事量をこなし続ける吉見さんの仕事術もいつか別の機会にうかがってみたい。

(大澤 聡)

1 「いま・ここ」を内破する知

大澤 ある席で一緒になった理系の若い研究者が「文系不要論」めいた発言をしていたんです。けれど、よくよく話を聞いていくと、そこでイメージされている「文系」は『源氏物語』のストーリーを深く味わったり、好きなサブカルチャーを分析したりといった、かなり偏狭な理解に由来するものでした。そんな貧弱な文系観から不要論が展開されてしまう。制度改革を推進している人たちもじつのところ大差ないんじゃないでしょうか。

吉見 そう。文系的な知の営みとはなにかを知りもしないのに、文系はいらないと強弁している。困ったものですね。

大澤 こうした議論に対する反駁として、一見すると役に立ちそうにない学問でも長期的には役立つこともある、あるいは、役に立たないことこそが最大の利点なのだという価値転倒のロジックがありますね。しかし、吉見さんも『「文系学部廃止」の衝撃★』でお書きになつていたように、それはおそらく戦略として有効ではない。むしろ、そんなレトリックの駆使こそをあざ笑うように、「これだから文系人間は……」とますます拒絶されてしまう。

★1 『「文系学部廃止」の衝撃』
吉見俊哉著、集英社新書、二〇一六年刊。

吉見 なにより、文系が役に立たないという理解は、根本的にまちがっています。しかし、それが通念として浸透してしまっている。

大澤 吉見さんは、役に立つのだと積極的に打ち出していく論法ですね。

吉見 はい。ただ、その場合、「役に立つ」という概念を偏狭な一般通念よりもひろいものに組み変えないといけない。

大澤 というと？

吉見 一般的になにかが「役に立つ」という場合、実現させたい目的があつて、それを達成するための手段の有用性がしばしば語られますね。たとえば、東京―大阪間を移動する際、新幹線よりもリニアモーターカーのほうが時間短縮できるとか、大容量のデータを解析するにはどんなシステムを構築すればよいのかとか、目的がはっきりしている条件のもとでは、理工系、とりわけエンジニアリングの知はとも役に立つ。

大澤 ただし、そこでいう「有用性」を追求していくかぎりにおいて、ですよ。

吉見 そうなんです。ある目的が多くの人びとのあいだで当然のものとされる期間にはおのずと限界があります。三〇年なり五〇年なり一〇〇年なりといった長いスパンで見たときには、その社会における目的の軸がどこかで必ず変わる。三〇年前に当たり前だったことが、三〇年後のいまでは常識でもなんでもないなんて事態は

★² 「より速く、より高く、より強く」

これまで何度もおきてきました。

大澤 つまり、価値観や倫理性の側面から考えるとき、理系的な知だけでは必ず限界につきあたると。

吉見 一例をあげましょう。一九六四年の東京オリンピックの標語は「より速く、より高く、より強く」^{★2}でした。そこに価値がおかれて、人々も受け入れていたわけです。だから、オリンピック開催に合わせて新幹線や首都高速道路や地下鉄をつくり、速くはない都電を廃止し^{★4}、速い東京を実現した。

大澤 「速く、高く、強く」のモードは高度経済成長期の各所の目標を形成してもしました。けれど、いまでは経済状況も価値観もずいぶん異なっている。

吉見 「より愉しく、よりしなやかに、より末永く(サステイナブルに)」^{★3}が、いまの社会が重視すべき価値ではないでしょうか。

略

「より速く(Citius)」、より高く(Altius)「より強く(Fortius)」は、ドミニコ教団のデイドン神父(Henri Dyon, 1840-1900)が発案し、クーベルタンが一八九七年に採用した標語。国際オリンピック委員会(IOC)がオリンピックのモットーとして公認したのは一九二六年のこと。

★3 新幹線、首都高速道路、地下鉄

東京・新大阪を結ぶ東海道新幹線は一九六四年に開業。首都高速道路は六二年に京橋・芝浦間が開通。浜松町―羽田空港第2ビル間を結ぶ東京モノレール羽田空港線は六四年に開業。

★4 都電を廃止

一九六三年一〇月、東京都電車(都電)の北青山一丁目―三宅坂間、半蔵門―九段上間を、東京オリンピック開催にともなう道路整備のために廃止している。